

第20号

発行：Dream 五代塾
吹田市千里山西 5-14-17
発行責任者：理事長 川口 建

●「赤心」継かん
Dream

五代塾 Sinbun (新聞)

GodaiJuku

五代の生涯の偉業

「弘成館」鉦山業 (八)

Dream 五代塾顧問 八木孝昌

五代友厚代理 早田傳之助

本紙第18号掲載の拙稿「シンポジウム基調講演『五代の鉦山業』報告」に、明治九年七月八日に半田銀山側と地元農民側で交わされた本邦初の公害防止協定と言つべき「締約書」の内容とその背景を紹介しました。その際、「締約書」における銀山側の署名者を「五代の代理人と鉦長吉田の二名」と書いたものの、代理人の氏名「早田傳之助」を記しませんでした。また本紙に連載する「五代の生涯の偉業 『弘成館』鉦山業(三)」「第12号」で「締約書」を取りあげたときには、「半田銀山鉦長吉田市十郎と北半田村・南半田村・谷地村・塚野目村・伊達崎村の各総代等との間で『締約書』が交わされました」と書いて、代理人そのものを抜かしました。氏名は「締約書」の記載で分かっていたのですが、人物像について筆者が知らなかつたために、そのような杜撰かつ失礼な書き方をしてしまいました。

その後幸運なことに、当代理人のことが分かる文献を入手することができました。そこで本稿では、「五代友厚代理 早田傳之助」について書きます。

造幣局「五代友厚と桜まつり」

本年三月二十七日、大阪市北区の造幣局において例年の行事である標記企画が大阪市立大学同窓会(五代友厚記念事業委員会)の主催のもとに開催されました。その企画で筆者八木が「半田銀山の公害防止協定」という講演をしたのですが、そこに遥々半田銀山の地元の福島県伊達郡桑折町(こおりまち)から教育委員の鈴木キヨ子さんに来場いただきました。筆者が講演前に鈴木さんにご挨拶した折に、鈴木さんは持参の『早田伝之助翁伝』(早田伝之助翁伝記刊行会会長佐藤西三、昭和六十年(一九八五))を貸してくださいました。

名望家早田家の系譜

『早田伝之助翁伝』(以下「翁伝」)の冒頭には、早田家が、

以下、同書から引用しながら、早田家と八代目について素描します。なお同書では「伝之助」と表記されていますが、署名の文字を尊重して旧字の「傳之助」を使います。

早田家は福島県伊達郡桑折町大字北半田字御免町の現在地に居住し、徳川時代幕府直轄で経営されてきた半田銀山の御用商人として代々鉦山の鉦木及び諸資材

食糧等の納入をしている名望家で、自らは何十人と雇人を持ち、農業を営んでいた農家であつて、(中略)代々庄屋、名主等を務め、特に桑折代官所の信任厚く、地方住民の難事の調停役としては代々の当主が何時も陣頭に立ち、

と説明されています。ここからは、早田家が幕府直轄半田銀山の中心的な御用商人であつたことに加えて、代々庄屋あるいは名主として地元民の世話役を担つてきた名望家であつたことを知ることができます。

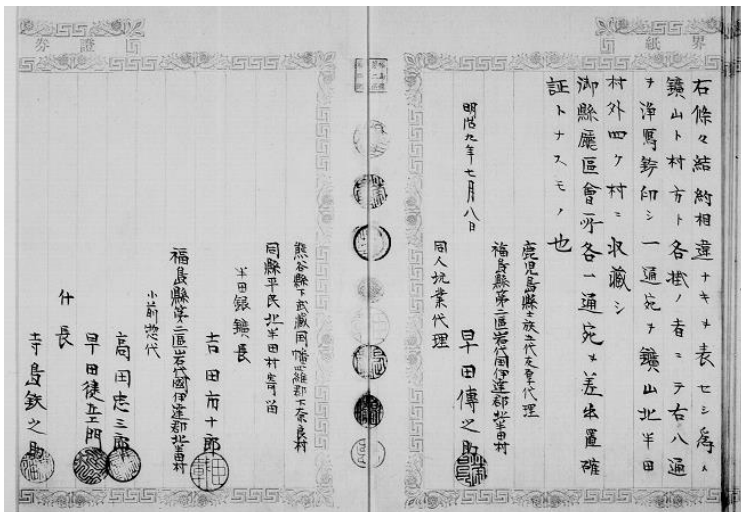
弘道という心学の号をもつ六代目傳之助は、多数の弟子をもつ心学の師であるとともに、先代から引き継いだ郡内名主代表の里長でした。文政五年(一八二二)には、多大の功績により名字帯刀を許されて、六代目早田傳之助となりました。

幼名武助の七代目は、幕府が慶応二年(一八六六)に半田銀山を閉山したことによつて働き先を失つた地元民を救済するために、幕府より銀山を借り受けて、翌慶応三年から事業を再開しました。新鉦脈を発見するなどの成果が挙がりましたが、明治三年(一八七〇)に坑内炭酸ガス中毒事故が起きた際、七代目は制止を振り切つて入坑し、死亡しました。この事故のあと、半田銀山は廃坑となりました。

七代目が事故死を遂げたときに生まれたばかりの赤子であつた八代目早田傳之助が、「締約書」筆頭署名人の「鹿児島県土族五代友厚代理 早田傳之助」です。

八代目傳之助と五代友厚

七代目の死去により、早田家は赤子の八代目を除くと、「女ばかりの世帯」になりました。そこに後見人のようにして現れたのが五代友厚でした。筆者の推測ですが、有望な鉦山を探



締約書(大阪商工会議所蔵)

していた五代のもとに廃坑の半田銀山が候補として寄せられ、それを入手するために情報を集めたところ、事故によって廃坑となるまで、銀山経営に当たっていた早田家のことが分かります。そこで五代は早田家に挨拶に行つた、という次第ではなかつたでしょうが、『翁伝』には八代目が五代の世話になつた様子が次のように書かれています。

この人は生れるとすぐ父親が鉱山で殉職後、伝之助を襲名、若旦那として母親の百合子さんに育てられました。当時は地方に学校というものはありませんし、若干身体が弱かつたこともあつて、自宅に先生をお招きして泊り込んでもらい教育をしていただきました。これら先生の紹介斡旋を下さつた方は五代友厚という人で、明治の元勳の一人で(注：五代は元勳に含まれない)大阪商工会(注：大阪商法会議所)初代会頭にもなり、政府の造幣局を創設、全国の金銀鉱山を数十ヶ所も経営した経済界の第一人者でした。半田銀山も事故発生後五代氏が永年経営しましたので、時折り見廻りに来る度毎に早田宅に泊り親交があり、伝之助の成長を見ており、母百合子さんの頼みを受けて逐次日本でも有名な先生を頼んでくれ、仙台市に在つた「養軒堂」という塾校より代る代る先生を招き、一般教育をしてもらつたのです。

そういうしている内に結核にかかり、闘病生活に入った訳です。(中略)病氣のことを知つた五代氏が心配して、早速東京に出来たばかりの順天堂病院の初代院長に半田迄来て診てもらい、以後この佐藤院長の指示に従つて一生終つていきます。佐藤院長が後に、俺は日本一の医者、日本一の患者は早田だといつたそうで、先生の指示

通りの生活をしましたので健康は平均に維持し、家業その他は支障なく運営されていったのです。

以上の叙述で、五代と早田家のつながりが分かりましたが、『翁伝』の当人である九代目傳之助が同書の一章となつていて、翁への聞き書きの中で八代目と五代について語っています。次にそれを見ます。



8代 伝之助(翁の父)
『早田伝之助翁伝』より

九代目傳之助(穂陽)の五代評

『翁伝』に収められる九代目傳之助の聞き書き「早田穂陽(穂陽は号)述 わが心の世界」(大橋富士子整記)には、五代と早田家との関係や五代のひととなりが次のように述べられています。地域農業振興に尽くした九代目は畜産功労者として藍綬褒章を受章した福島県の名士で、競走馬の育成に実績を挙げて、福島競馬場馬主協会会長や日本中央競馬会名誉顧問を務めた著名人でもありました。

五代友厚という人が、この鉱山を経営することに於いて、来られた。私は知らないが、聞くところによると、家の奥座敷によく五代さんが泊つておられたそうだ。弘成館といつてね、五代さんの仕事場の名なのだ。ここは半田の弘成館、東京にも弘成館があり、大阪にも弘成館がある。(中略)五代さんという人は、第一流中の一流の人なのだが、その人が大変私の父を、どういふわけだか知らないが、かわいがつてくれたんですね。

うちの親父は若い時から胸を患つたら、何しろ胸を患えば死ななくてはならないという時代でしょう。これは大変だといふので、東京からお医者様を頼んだ。初代順天堂の院長を、五代さんが呼んで下さつたんだね。それで助かつたんだ。

半田銀山のほうも、將軍時代の勝手なやりかたとちがつて、五代さんがやるようになって、五代さんは無論だが、鉱長さんも職員も、みんななかなか立派なジェントルマンですよ。東京や京都や大阪から来たようだね。そうした立派な人たちが来り来て、やつた鉱山なのだから、唯の銀山ではないですよ。まだ五代さんは若かつたんだがね。

五代さんは鉱山を十年も二十年もやつたのではない。半田銀山をやりはじめたばかり。また歴史も何も無い。大した鉱山ではなかつたんだらうけれど、それもまだ五代さんが三十何歳かの若さで(注：取得時で満三十八歳、天德行幸時で四〇歳)、天皇陛下をお招きするということが唯の人にできますか。そこにも、五代さんという人は、稀なる人間だ、と私は思つている。そういう人にびつたりついている。いろいろ世話になつたり、ご指導に預かつたんですからね、うちの父は。それで東京にも度々行つて、偉い人たちもおつき合ひしている。

このような発言からは、五代が早田家の厚い信頼を得ていたことが伺えます。本稿冒頭に出てくる鉱長の吉田市十郎は、かつて五代が薩英戦争の折に英国海軍の捕虜になつたあと、武州下奈良村の名主吉田市右衛門(四代目)の屋敷に潜伏した、そのときの吉田家の養子です。五代にはいつたん結んだり、世話にな

つたりした人間関係を大切にして、後々まで生かしてゆく顕著な特質がありますが、そのことが八代目早田傳之助との関係にも現れています。

「締約書」調印代理人の理由

本稿の最後の問題は、五代が何故「締約書」調印に代理人を立てたか、です。明治九年の時点で、慶応三年の父親事故死の折に「生れたばかり」だつた八代目傳之助は十歳ほどでしたから、調印式に臨む資格はありません。五代が「代理」を立てた理由を推測すると、二つのことが考えられます。

一つは、地元の名望家であるとともに、半田銀山の旧経営者であつた早田家に花をもたせるためです。調印に臨む地元の村々の代表たちも調印相手として早田家の八代目は異存のないところでしょう。この代理の立て方は、調印の二週間ほど前の明治天皇半田銀山行幸の折の案内役が五代ではなく、鉱長の吉田市十郎であつたことと同じ発想によるものです。

もう一つの理由は、慶応四年(一八六八)の戊辰戦争における薩長を中心とした官軍の会津攻めが地元福島県に大きな傷跡と強い怨嗟の念を残しているという事情でした。五代には、薩摩出身の自分が天德行幸の案内役を務めたり、調印式の鉱山側代表になつたりすれば、地元の人たちの薩長官軍へのわだかまりを刺激しかねないという配慮があつたのではないのでしょうか。このように推測できる根拠が一つあります。



惣難獸 (大阪商工会議所所蔵)

拙著『新・五代友厚伝』に「惣難獸」という五代作の戯作を論じた節があります。それは「明治元戊

辰中春の頃、諸国の山奥等より、異形の獣生じ、爰(ここ)かしこに集屯して、万民を悩(なやます)事甚しく、依て退散の事を、神に祈念仕給(たま)ふて始まつています。詳述は避けませんが、「惣難獣」は戊辰戦争の会津攻め等で蛮行を振るつた官軍を指している(と筆者は解釈しています)。実際、官軍の参謀として奥羽に乗り込んだ、長州の奇兵隊あがりの世良修蔵は、雑多な農兵等で補強された官軍の野蛮な振舞いを象徴するよう(な)成り上がり者でした。そういう官軍を念頭に置きながら、五代は官軍にあらずば人にあらずの風潮の中で、それを「惣難獣」として戯作のかたちで批判したのでした。

福島県人の心情が理解できた五代は、自分は表舞台に立たないほうがよいと控えた位置に身を置いたのではないのでしょうか。『翁伝』は八代目の母堂である百合子(よひご)の次のような官軍との武勇譚を伝えています。

明治維新の時、官軍が東軍を追つて来た時、途中物資の強奪のため立ち寄つた際などは、男女雇人を全部逃がして置いて自分一人が残り、たすきを掛け手拭いで冠つて女中になりまして、風呂の火をたきながら官軍と渡り合ひ、家の人は今留守で私は女中であると言ひ張り、官軍を追払つたという肝玉の大きい度胸もあり、大家の支配者として申分のない女丈夫だつたそうです。

五代がもし薩摩出身丸出しのような実業家であつたとすれば、こういう刀自(やまご)が采配を振るう早田家へ自由に入りできたとは思へません。薩摩出身でありながら、官軍の奥羽攻めには批判的であり、福島県民の心情に共感できた五代であつたからこそ、早田家と親交を結び、半田銀山操業に対する地元農民の要求にも誠実に対応し、最終的に半田銀山が地元

できたのでした。『翁伝』が描く五代像は、「政商五代説」が描く悪徳商人像と何と大きく隔たつて(る)いること(で)しょうか！

今回は「五代友厚代理 早田傳之助」という「締約書」の一行から五代を考えました。

明治維新と朱子学

Dream 五代塾会員 河本雪夫



下関戦争 (Wikipediaより)

日本は明治維新により徳川体制から天皇の体制に一新された。この原動力となつたのが体制矛盾に目覚めた下層武士の若者たちであつた。彼等が旗印としたのが尊王攘夷である。この言葉の思想的バックボーンになつたのが朱子学、陽明学であつた。この朱子学を読み解くことで当時の志士たちの行動の源が分かるように思われる。

明治維新は一般的には徳川幕藩体制による封建的支配から欧米的な近代国家への変革ととらえられている。では維新の志士たちは西洋哲学を学んで近代国家建設を志したのである(ら)うか。必ずしもそうとは言えない面がある。

明治維新には尊王思想が最大のテーマであり、その流れは水戸光圀を上流とし、水戸陽明学を下流とする系譜である。

井伊大老を暗殺した水戸浪士、長州の高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文、山形有朋などを輩出した松の下村塾の吉田松陰、薩摩の西郷隆盛などは陽明学の信奉者である。ここに「朱子学・陽明学」が明治維新に与えた影響がみられるのである。

明治維新は尊王攘夷をスローガンに起こされた反乱であるが中心は尊王にあり攘夷は手段だつたように思われる。孝明天皇は攘夷を本気で主張していたが、しかし諸外国の主張を受け入れても尊王思想だけは守り通したのである。

朱子学の思想によれば王はあくまでも天皇であり幕府はその行政機関にすぎないのでその立場が逆転しているというのが水戸陽明学を学んだ志士たちの反乱であつた。ゆえに明治政府の中枢になつた薩長の高官たちは、尊王は妥協することはできなかつたが攘夷は簡単に捨てることのできたのである。

政府の中枢を離れた五代友厚は尊王攘夷という思想をどこまで突き詰めていたか不明である。明治新政府の中で西洋合理主義的立場に立ち、政府から中立的なフリーハンドを保つたために彼が今評価されている経済活動が比較的自由にできたのではないかと(も)思われる。

五代友厚を語る(と)き薩摩の人たちと肌合ひがあわなかつたのは(た)く(は)案外(な)こ(の)ころ(に)原因があつたのではない(か)。彼がグローバルな視点に立つて活動できたのも攘夷という呪縛に縛られなかつたからである(ら)う(に)思われる。

北海道旅行

黒田清隆との出会い

Dream 五代塾会員 川口由美子



「開拓使官有物下げ事件」についての教科書の訂正経過はDream 五代塾新聞で掲載されているが、その中心人物でもある黒田清隆について4月下旬の北海道旅行で興味深い事績一件に遭遇した。

一件は北海道新日高町にあるサラフレッドロード新冠の二十間道路(桜並木)で黒田清隆が北海道開拓使長官時代にこの日高に野生馬の群れをみて産馬改良に最適の地であると判断し、広大な土地をサラフレッド育成地として開拓、



現在の家畜改良センター新冠牧場及び周辺の日高優駿ロードとなつて(い)る。そこに大正5年から3年の月日(を)かけエゾヤマサクランボを移植し、幅二十間(36m)約7kmの行啓道路として職員たちが作つたのが現在の素晴らしい桜並木で観光名所となつて(い)る。



もう一件は札幌の羊ヶ丘に建つクラーク博士だ。黒田清隆が1871年に留学生七名と共に渡米し開拓精神に満ち溢れ、気候も類似していたニューイングランド(アメリカ合衆国北東部地方・現6州)を北海道開拓の模範とする(こ)とに決(ま)り、農務局長官のホーレスケブロンを開拓使顧問として迎え開拓に関し指導を受けた。実際の教育に関しマサチューセッツ農科大学学長であつたクラーク博士を招聘する(こ)う(に)吉田清成駐米公使(五代友厚引率の薩摩スチューデントとして英国留學)や、またその大学での教え子であつた新島襄などの働きがあり、二年の約束を博士は一年で達成する(こ)う(に)意気込み(で)来(た)。わずか約9か月の滞在期間であつたが開拓精神を日本の若者たちに伝え、離日する(と)きにあの有名な『青年よ大志を抱け』の言葉を残した。

五代友厚と同じく黒田清隆も海外の技術者や知識人を日本の未来のために招聘し大きな遺産として種をまいて(いた)結果が現在に残つて(い)る(こ)とに非常に感銘(を)受(け)た。

「ラ・カンパネラ」
幼い日のシドニーでの
思い出の旋律

Dream 五代塾顧問 曾野豪夫



フジ子・ハミングさんのCDジャケット

ピアノリストのフジ子・ハミングさんが四月に亡くなりまし
たね。昭和六年生れ、私の二歳年長の九十二歳でした。

六〇歳代に入った私は梅田の大きなビルにある天井の高い、ゆったりとしたリラクゼーション・マッサージサロンに月に二回程通っていました。

一九八八年満五十五歳の直前、朝日新聞にオーストラリア大使館が工業投資促進顧問を募集しているとの記事を見て応募し、幸いにも採用が決まりました。五年間勤務のうち、一九九〇年代後半は(勸)大阪府臨海りんくうセンターに五年間勤務していました。その頃のことです。

ある時、心地よくマッサージを受けていると、BGMからピアノ演奏の「ラ・カンパネラ」の曲が流れていることに気がつきました。その時は曲名を知りませんでした。翌日は次々と他のピアノ曲に移り、また「ラ・カンパネラ」の調べが...そして突然戦前シドニーの子供時代(幼稚園〜小学校一年生)の記憶が蘇りました。この曲は母がよく弾いていた曲だ、と。

そのことを若いマッサージ嬢に語り、気持ちよくほぐされた身を阪急電車にゆだねて苦楽園の自宅に帰りました。次回行くと、しばらくこうとうととしてあ



オーストラリア製自動ピアノで練習する筆者 昭和9年(1934)

れ?と思い、マッサージ嬢にたずねました。

「先ほどから同じ曲ばかり流れているが...」「はい、曾野さんが前回この曲が好きだ、と言われましたのでこの曲のみを連続再生できるように新しいテープに録音しておきました。いい曲ですね。目が覚めた!」ありがとう。

でも他のお客さんが...「他のお客さんは気がつかれないと思いますよ...うふふ。」それから毎週通うようになりました。

浪々の身となった二〇〇〇年頃、私は西宮の自宅から神戸六甲にある娘の婚家先に向けて一人車を運転していました。カーラデオからクラシックのピアノ独演が幾つか流れてきて何れも母がよく弾いていた曲であることを懐かしみ、車を歩道側に停めてじっと聞きほれていました。やがて至天のアナウンサーと演奏者の対談が始まり、初めてこのピアノリストがフジ子・ハミングさんという名前前で、簡単な経歴を知りました。そしてあのマッサージサロンで聞いていたピアノ曲が「ラ・カンパネラ」で、その他のすべてがフジ子・ハミングさんの弾いていたものだったと思いいたりました。

すぐにCDを購入しました。いま、そのCDを聞きながら、五代さんとは余り関係のない話を書いて読者に申し訳ない気持ちでおります。父は兼松のシドニー店に昭和二年以来、二回合計十五年間駐在していました。シド



シドニーの家 昭和8年(1933)

ニーの家の応接室の書棚に五代龍作編『五代友厚傳』が並べてありました。私が生れた昭和八年の刊行。なぜこの伝記がシドニーにあつたのか。実は、私の母方祖父父見省一の妻綾(つまり私の外祖母)は、五代友厚の娘武子、藍子と従姉妹同士だったからです。(本紙第十一、十四、十六号参照) 次号へ続く

Dream 五代塾活動状況

◆第14回 Dream 五代塾セミナー実施

4月20日(土)定例のセミナー(五代友厚勉強会)を開催した。(参加者15名)

文久3年(1866)3)7月8日、五代は横浜で英国旗艦から脱出し、清水卯三郎の紹介で武州



下奈良村の吉田市右衛門邸に潜伏、翌年1月に長崎に戻り酒井三蔵邸やグラバー邸に潜んだ。この間、薩英戦争時の対応が藩内から五代や寺島への批判は強く、小松帯刀が上

五代才助 上申書 前文

私は今般重罪を犯した上、一旦亡命に似た所業に及び、愚存を申し上げるのも恐れ入るところではございますが、御国家のため、現今天下の事変に対する臨機応変の御所置について、万死を願ひ、以下に申し上げるものであります。

世界は五大州が入り乱れて、和すれば盟約して貿易を行い、和さなければ兵を交えて互いに相手を襲ひ奪おうとしています。これは地球上の風俗自然の法則のようなもので、如何ともすることができません。英仏のような強大な国を前にして、鎖国など成り立たない形勢であるのに、安政五年の横浜開港以来、勤

王攘夷を唱え、天下に同志を集め、自国の政治を掌握するかのような大言を吐き、愚民をまどわし、その上、先だけ走り、浪士ども増長し、外国撃ち払いの攘夷などできないことを知らず、国政を妨げて内外の大乱を引き起こし、自滅を招く兆しがあるのは、まことに嘆かわしいことでもあります。もちろん国体を思って攘夷を唱える志は賞めるべきではあります。惜しいことに、現今の地球上の道理に暗く、我を知らず、彼を知らず、成らずを知らないこと、愚かに至ります。危機が切迫しているのに、西歐に植民地化された東インドや清国と同じ道歩んで、ついに国体を失うことになりかねないのは、はなはだ歎息するところでもあります。西歐諸国は鎖国するか、開国するか、その理を実験研究して、富国強兵の道を進み、大いに発展して、天下に幅を利かせています。天下の形勢は攘夷に向かってはならず、外国拒絶が成り立たないことを理解し、天下の形勢は開国に帰するのを知る時期です。そうであれば、諸侯は競って富国の事業を勉強するべきであります。先んずれば人を制するの

であります。諸侯が手をつけないうちに、富国の充実をなさないでは、容易に成功することは難しいのですから、この機会を失うことなく、以下に述べる重要な諸件に着手されますようにと存じ奉るものであります。

大意現代語訳・『新・五代友厚伝』より引用

海亡命を勧めた位尋常ではなかった。

この様な状況下、文久4年(1864)6月頃、五代は藩内批判や過激攘夷派の国内混乱を憂慮しつつも、次元の異なる「開国・近代化」への「上申書」を藩に提案した。

「上申書」は約13,000語を超える意見具申書となっており、前文と本文に構成され、前文は一言謝罪を述べ、大半は「現今天下の事変」に対し藩がとるべき施策を提案したいと言っている。いわゆる世界情勢と日本情勢、及び藩がとるべき方向について「富国のマニフェスト(宣言)」と呼びがべき見解が書かれている。本文は本紙面では言い表せないが、極々簡単にまとめると、貿易拡大、産業振興、人材育成の三つを押さえたもので、具体的商品名、価格まで網羅した、詳細にして具体的であるのが興味深い。

五代の上申書を読み解くと、その後の明治政府の「殖産興業」策がいかに五代の想定に入っていたかがうかがい知れる。前文は本紙面三段目に、現代語訳(『新・五代友厚伝』より引用)を掲載したので是非読んで頂きたい。(川口建)

◆第15回 Dream 五代塾セミナー予定

日時:6月15日(土)14時~16時(500円)場所:川口宅 勉強内容:進行(川口建)教材:「開学の祖 五代友厚小伝」(著者八木孝昌・非売品) 18話の第5話「薩摩藩英國留学と五代のビジョン」

編集後記

本紙を2021年3月に創刊し、今回20回の発行を迎えることができました。愛読して頂いている皆様にお礼を申し上げます。当塾の理念「赤心」継が(せきしんつな)を再認識し、五代さんの精神・事績を本紙を通し未来へ継いでいきます。今後ともご指導ご鞭撻の程、宜しく申し上げます。

(連絡先:川口建) Email:gogoken12345@gmail.com Tel:080-4497-5688 HP:https://www.dream-godai.com